

結章

一、本論文のまとめ

第1部「ドメスティック・イデオロギーへの挑戦——田村俊子にみる諸問題——」では、俊子の初期作品及びその作中人物、そして同時代の〈女性同性愛〉言説を分析し、「女性性・ジェンダー」が家父長社会に規定されていることにいち早く気付くことにより誕生した「作家・田村俊子」は、その強制された「ジェンダー・アイデンティティ」に対抗する作品を生みだしたことを示した。

作家・田村俊子のデビュー作『あきらめ』が出版されたのは、「新しい女」問題が社会の注目を集めはじめた時期であった。第1章では、『あきらめ』に見られる「新しい女」の諸問題を中心に論じた。女主人公・富枝は、「女学生世界＝ノー・マンズ・ランド」の内部にいる限り、〈恋愛関係〉においても〈書く領域〉においても、男性性の「ジェンダー・ロール」を自由に演じることはできたものの、社会に出るとその自由は全くなり挫折してしまう。このように、俊子は、「女学生世界」の共同体の形成から崩壊への過程が、女学生の〈同性愛〉と〈自立〉問題の消長とパラレルになっていると認識し、当時の「女学生上がり」が、「良妻賢母」という「女性性ジェンダー・ロール」に限られた、唯一の役割を担わされていることを描いて見せた。

俊子は、家父長社会に規定された、強制的異性愛を含む良妻賢母制度に対して異議申し立てを行ったが、それと同時に、「青鞥」同人との間で〈同性愛関係〉を作り実践していた。彼女たちが行ったレズビアン・パフォーマンスは、家父長制度の中で絶対視されていた女性性の「ジェンダー」「セックス」と「セックシュアリティ」の秩序を転覆させるものであった。第2章は、このことを中心に論じた。しかしながら、「女学生上がり」は、〈公的領域＝社会〉と〈私的領域＝家庭〉のいずれにおいても、その「女性性ジェンダー・ロール」から逃れえず、そのことを、俊子は、さらに初期作品の中で描いて見せた。第3章「ドメスティック・イデオロギーから脱出する願望——田村俊子の〈書く女〉と〈演じる女〉について——」では、俊子の作中人物であって、しかも「新しい女」を代表していた〈書く女〉と〈演じる女〉を中心に論じた。この章では、彼女たちの〈ドメスティック・イデオロギー〉からの脱出願望を分析し、後年、俊子自身が日本を離れていった事実解明の手がかりをそこに探った。〈私的領域＝家庭〉と〈公的領域＝社会〉において、絶対的な「女性性ジェンダー・ロール」を強制されていた女性たちにとって、海外とは、〈ドメスティック＝家庭＝日本国内〉から逃れるための選択肢の一つであった。

海外渡航願望を抱く女性像と同時代の海外渡航に関する言説は、実際に深く関わっていた。第4章「〈渡米熱〉、〈墮落女学生〉と〈写婚妻〉——1890年代後半の〈渡米熱〉と『大陸日報』にみる〈写婚妻〉像——」は、第3章ですでに探究した問題、つまり、女性たちが海外へ脱出しようとする願望は、同時代言説の中にどのように位置づけられるべきかについて、さらに詳しく論じた。「移民政策」の一環である女性同伴の「殖民政策」¹は、計画的に女性の海外渡航を奨励していたが、それによって「女学生上がり」の〈渡航熱〉は煽り立てられたといえよう。このような時代背景の中で、多くの「女学生上がり」は「写真結婚」の花嫁として渡航した。しかしながら、移民地における女性たちは、また別の苦境に直面することとなった。彼女たちは、「女性性ジェンダー・ロール」の抑制から逃れるどころか、男性と同じ肉体労働を強いられ、日系社会から〈遠隔^{ロング・ディスタンス}地ナショナリズム〉を押しつけられ、その上、白人社会から人種差別を受けていたのである。そのような事情から、俊子は、「写婚妻」を読者に想定する「婦女欄」を『大陸日報』に設けた。

カナダのバンクーバー時代における俊子の思想的変遷、特に〈女性問題〉に関しては、移民先の日系社会の環境から深く影響を受けていた。第5章「ナショナル・アイデンティティとジェンダーの揺らぎ——佐藤俊子の日系二世を描く小説群に見る二重構造——」では、俊子が1936年に日本に帰国してから創作した、日系二世を描く作品群を手がかりとして、〈女性問題〉に対する彼女の姿勢をさらに分析した。1930年代、日系二世たち、特に日系二世の女性たちが白人社会で遭遇した〈人種差別〉問題をとおして、彼（女）たちは、日系社会内部（＝日本国内）にも同じような差別問題が存在していることに改めて気付く。「カリフォルニア物語」のルイとナナを見れば、日系二世の女性たちが、移民社会の中で、「大和撫子」という「日本的な女性性ジェンダー・ロール」を強要されていたことがわかる。彼女たちを取り巻く状況は、その母親の世代とは変わらなかったのである。そこで、日系二世たちは、日系社会（＝日本社会）の内部と外部に存在していた問題を解決するための策として、「社会主義」に向かったのである。

第6章「佐藤俊子の人種問題への認識及び社会主義的立場——「小さき歩み」三部作を軸として——」では、人種問題及び彼女の社会主義的立場をめぐって、俊子が同時代思潮からどのような影響を受けていたかを論じた。俊子は、日系二世を描く作品群を創作すると同時に、カナダの女流詩人ポーリン・ジョンソン（E. Paulin Johnson）とアメリカの劇作家ユージン・オニール（Eugene O'Neill）を紹介・翻訳した。それは、俊子が、二人の作品に底流している「人種問題」に関心を寄せたからである。また、『小さき歩み』三部作で俊子が取り上げた、社会主義者や労働運動家たち、例えばユージン・デブス（Eugene Debs）、ラムゼー・マクドナルド（Ramsay Macdonald）、ロ

ーザ・ルクセンブルク (Rosa Luxemburg) などは、みな第一次世界大戦中に反戦的立場に立ち、帝国主義の拡張と資本主義との結びつきが戦争を引き起こしたと指摘している。

第7章「上海時代(1942-5)の佐藤俊子と中国女性作家・関露——中国語女性雑誌『女聲』をめぐる——」は、上海時代の俊子が『女聲』を介して、中共の地下工作員であった関露との連帯関係を築き上げたことについて論じた。俊子がカナダ時代に得た〈人種を越える〉国際的共闘の体験をふまえ、さらに彼女の社会主義的立場を視野に入れながら、俊子と関露の、国境を越える〈姉妹的連携〉^{シスターフック}関係を分析した。

日本占領下の上海において、俊子が取り組んだ中国の女性問題と、同時代の中国女性文学に見られる〈女性問題〉とを対比すれば、俊子が上海に残した足跡が一層明白になる。第8章「日本占領下の上海における女性問題の受容——プロパガンダ誌の女性文学と『女聲』の読者欄をめぐる——」では、俊子が主催していた『女聲』の「読者投書欄」と、占領下の上海における女性文学との相関関係について分析した。日本占領下の上海という特殊な時間・空間において、それまで〈女性の声〉を表すことができなかつた中国女性文学は、その開花期を迎えていた。『女聲』の「読者投書欄」及び張愛玲や蘇青らによる女性文学が、女性の「結婚」「日常生活」という問題に注目していたことから、これらの問題が、当時の女性に共通するものであったことが窺える。

二、本論文の成果

第1章においては、俊子が提起した〈ジェンダー〉問題について、次のことを明らかにした。俊子は、女子学生が「女性性ジェンダー・ロール」に束縛されていることにたいして異議申し立てを行ったものの、逆に「男性性ジェンダー・ロール」を特権化してしまう危険を犯していたこと。例えば、富枝は下級生・染子との恋愛関係において、異性愛関係である男／女という二項対立のパラダイムを踏襲しており、二人の関係においては、富枝が明らかに「男性性ジェンダー・ロール」を演じていた。二人の上下関係を考えてみれば、「男性性ジェンダー・ロール」の優位性は、二人の関係をとおして再び強調されてしまう。このように、女性が「女性性ジェンダー・ロール」を強要される事態を批判した俊子であったが、この時期、「男性性ジェンダー」の優位性を認めていたことを指摘した。

第2章では、俊子と「青鞥」同人たちの〈同性愛関係〉においては、彼女たちの「ジェンダー」「セックス」そして「セクシュアリティ」が、必ずしも同一性を持っているとは限らないことを明らかにした。これによって、「良妻賢母」制度に規定されて

いた、女学生の「ジェンダー」「セックス」そして「セクシュアリティ」は、〈女性性〉そのものであったという神話が打破されたともいえよう。また、この章においては、第1章ですでに言及した、俊子の「ジェンダー」意識を一層明らかにした。俊子は、〈二項対立〉のパラダイムで「ジェンダー」と「セクシュアリティ」を捉えていただけでなく、さらに、このパラダイムに常に優位的な〈男性性〉を求めていたことが明らかになった。むろんこれは、俊子の限界性を示唆するものではあるが、俊子のこの傾向は、家父長社会から〈女性性〉を押しつけられていたため、その反動として、〈男性性〉の「ジェンダー」や「セクシュアリティ」を求めるようになっていたのである。

第3章では、〈公的領域＝家庭〉と〈私的領域＝社会〉において、「女性性のジェンダー・ロール」に強制されていた女性たちを描く俊子の初期作品の分析をとおして、当時、女性の新興職業を代表する〈書く女〉と〈演じる女〉の海外渡航願望と、俊子が後年、日本を離れていく行動との相関関係について明らかにした。

第4章は、海外渡航願望と同時代の渡米熱、そして「写真結婚」の流行との相関関係を解明した。とくに多くの「女学生上がり」が、「写婚妻」として海外渡航していた事実を解明し、それが、俊子の初期作品の作中人物の海外渡航願望に見られることを指摘した。さらに移民地の環境の中で、俊子の〈女性問題〉に対する考えにも変化が現れたことを示し、この時期の俊子の女性論説からわかるように、俊子が〈ジェンダー〉問題を社会主義の枠組みで捉えるようになったことをつきとめた。移民地の女性たちは、ほとんどの場合、夫と共働きをしていたため、〈ジェンダー〉問題は労働運動と結びつかざるをえなかったのである。

第5章では、北米時代の俊子が、日系二世の問題を描きつつ、社会主義的立場に傾いていったのは、日系二世の問題と関係があることを指摘した。そこには、日系社会（＝日本社会）内部に存在していた〈人種差別〉問題と〈ジェンダー〉問題を批判する俊子の姿勢が見てとれる。また、〈ジェンダー〉問題と〈人種差別〉問題に共通している問題、つまり「差別」の問題は、社会主義が主張していた「階級」という考えに基づくことによって解消できると、この時期、俊子が考えていたことを明らかにした。

第6章では、カナダの女流詩人ポーリン・ジョンソン(E. Pauline Johnson)とアメリカの劇作家ユージン・オニール(Eugene O'Neill)の翻訳・紹介を介して、俊子が抱えていた〈人種問題〉意識の時代背景をまず明らかにした。さらに、「小さき歩み」三部作で、第一次世界大戦中に反戦的立場をとっていた社会主義者を取りあげることによって、俊子は、自らの反戦的立場をほのめかしていると指摘した。その上で、俊子の社会主義的立場と反戦的立場、そして彼女が晩年、日本占領下の上海で中国女性問題に尽力していた姿勢との関連性を解明した。

第7章と第8章からなる第3部「インターナショナル・フェミニストの連携——上海時代の佐藤（田村）俊子と中国女性問題——」では、中国語女性雑誌『女聲』を介して、上海時代の俊子と中国の左翼作家・関露との連帯関係を明らかにした。さらに、占領下の上海の中国女性文学に描かれていた女性問題をふまえながら、俊子と占領下の上海における女性問題との関わりについても解明した。関露の自伝的小説『新旧時代』（『上海婦女』1938年6月20日-1939年6月10日）、『黎明』（『女聲』第2巻第6期から第3巻12期、1943年10月15日-1945年4月15日）を見れば、彼女は、作家として出発した際に、〈女性問題〉に目覚め、そして〈女性問題〉の解決策を模索するうちに社会主義と出会い、信奉するに至ったという経緯がわかる。俊子と関露の辿る道は、似通っていたのである。また、これによって、社会主義的立場だけでなく、その相通じるメンタリティによって、二人の絆はさらに強められたと思われる。

第8章では、『女聲』の「読者投書欄」をとおして、晩年の俊子は、自分が抱いていた〈ジェンダー〉の諸問題が、中国女性の中に依然として存在していたことに気付く。彼女は、女性の「結婚」「日常」という、女性の中に偏在している問題に改めて着目し、そこに「インターナショナル・フェミニズム」の接点を見いだした。そして、俊子は、『女聲』体験をふまえて、〈異人種間〉の女性同士が一つの「階級」をなす〈レズビアン〉の連続体を中国・上海で再発見した、と指摘することができた。

全体として成果をまとめれば、〈ジェンダー〉の視点からしか捉えられなかった従来の田村俊子像を、「人種」「階級」という視点を取り入れることによって再構築したということになる。また、新たな田村俊子像の構築を通して、田村俊子研究におけるフェミニズム、ナショナリズム、そしてソーシャリズムの相関関係を一層明らかにしたといえる。これによって、日本、北米そして中国における俊子の全体像が捉えられ、俊子の思想面の変遷をつきとめることができた。それは、ジェンダー問題から出発した俊子が、北米で人種差別問題に出会ったことで、社会主義を信奉するようになったという思想遍歴である。

また、俊子の思想遍歴を解明することにより、晩年の俊子が、中国の女性問題に尽力した背景が理解できるようになった。それは、無国境、無国籍的に活動していた田村（佐藤）俊子像を理解するためには、現代社会におけるグローバルイゼーションという視点が必要であったからである。換言すれば、本論文の位置は、このような田村（佐藤）俊子像を解読しえなかった過去の時代の限界性を裏付けるところにあったといえよう。従来の研究では、作家・田村俊子の「両性相克」を主題にする作品のみが注目され、本論文が明らかにしたように、〈海外に向けるまなざし〉を主題にしていた作品が対象とされなかった。とはいえ、俊子の海外への関心は、決して本論文第1部で取り上げた作品にとどまるものではない。たとえば、「海坊主」（『新潮』、1913年10

月)は、台湾に出稼ぎに出かけてきた母親の話、「暗い空」(『読売新聞』、1914年4月9日-8月29日)には、台湾で事業に失敗し日本に帰国した父親が登場し、そして「前途」(『太陽』1915年9月)には、朝鮮人女学生が登場してくる。これらの作品は、いずれも作家・田村俊子が、いち早く海外や植民地に関心を示していた証左となる。こうした作品が、将来の研究対象となることはいうまでもない。

三、将来の展望

本論文で論じた各章から、以下の課題が、今後取り組むべきものとして浮上してきた。「女学生上がり」たちが海外へ渡航する場合、その行き先は、欧米諸国もあれば、〈台湾〉や〈朝鮮〉のような日本の植民地もある。その逃避先として日本の植民地を選択したとするならば、それは、大日本帝国の植民地主義と共犯関係に陥りかねない。大日本帝国の「植民地」、例えば、朝鮮・台湾に移民していた女性層と、北米諸国に移民した女性層は、それぞれ移民する目的を異にしており、そして生活状況については、一層細かく研究する必要があると思われる。例えば、明治30-40年代には、「女教師」として朝鮮や台湾に赴任する女学生上りを描く文学作品も徐々に現れたが、これらの作品の出現と「女学生上がり」が海外渡航する時代背景との相関関係については詳しく分かっておらず、今後の課題となっている。

それから、第6章で言及した俊子が取り上げた社会主義者たちが、日本や中国に与えた影響は一体いかなるものであったかは、さらに深く追求する必要がある。この部分の解明によって、上海時代の俊子と関露との連帯を、グローバルな面から再検討することが可能になろう。

さらに俊子と関露との連帯関係について、二人がほぼ同時期に、〈人種問題〉に関心をもち始めた点に注目すべきである。1939年に関露は、アメリカの黒人詩人・作家のラングストン・ヒューズ(Langston Hughes)の作品を翻訳した。²それに対して、1936年3月、日本に帰国した俊子が発表した日系二世を描く一連の作品群、そしてカナダの女流詩人・ポーリン・ジョンソンやアメリカ劇作家・ユージン・オニールの翻訳からみれば、〈人種問題〉は、この時期、俊子の関心の的であったことがわかる。俊子と関露との連帯関係については、二人の周辺だけでなく、同時代の文学思潮及び社会主義の動向も今後調査しなくてはならないと思われる。この課題は、第7章で浮上したことにも通じているといえる。つまり、30年代における日本と中国のユージン・オニールの受容の背景、そして日中女性間の連帯感がどのように構築されていたかを究明することである。1930年代の俊子は、ユージン・オニールの作品を翻訳していたが、張愛玲も絶えず彼に言及していた。オニールが、当時、日・中両国におい

てどのように読まれていたかという問題は、戦時中における日・中両国の知識人のメンタリティを解明する際にも、重要な手がかりになる。また、敵国同士であった女性たち、つまり中国の左翼女性作家・関露や白薇、そして日本女性との連帯関係がどのように構築されていたのかという問題は、これからの研究課題である。

現在、田村俊子研究の蓄積はまだ不十分であり、これからの課題は数多く残されている。例を挙げると、彼女の初期作品の中に多く描かれた「新しい女」像、そしてそこに見られた〈ジェンダー〉問題意識については、西洋文学から受容した可能性もあり、それはこれからの課題の一つだと思われる。³そして、前述したように、初期作品を、〈海外に向けるまなざし〉を研究視点に入れて、再読しなければならない。そのほか、演劇関係の作品、例えば、脚本（「やきもち」(『文芸倶楽部』、1910年12月)、「奴隷」(『中央公論』、1914年7月))、女優関係の小説（「秋海棠」(『美芸画報』、1911年10月)、「女優」(『女学世界』、1916年8-12月)、そして劇評なども未開の研究領域である。〈台湾〉や〈朝鮮〉が登場している前述の作品や、これらの作品は、いずれも『田村俊子作品集』には収録されていない。したがって、田村俊子研究の目下の課題はまず『田村俊子全集』を編纂することにあると思われる。現在、田村俊子研究の土台とされている三冊の『田村俊子作品集』(オリジン出版センター、1988年)では、とても十分とはいえない。前述した各研究分野のこれからの進展も、おそらく『田村俊子全集』編纂の実現次第だと思われる。『田村俊子全集』が完成すれば、田村俊子研究は、今後、飛躍的成長を遂げることであろう。

1 新渡戸稲造によれば、日本語の「殖民」は「ヨーロッパ語のコロニーを翻訳するに当たりて新造せられたる日本語」である。彼によると、幕末文久2年に『英和対訳』に Colony の訳語として「植民」が用いられているのが最初だそうであるが、明治元年の「仏和辞典」では「植人」の訳語が用いられており、明治4-5年になって「殖民」が「民を殖すこと」(人口増殖)「民を殖ること」(開拓移住)の意味で定着したらしいとのことである。新渡戸は1916年の講義では、一般的に「[殖ではなく]『植』の字を用ひるやうになつたのは近頃数年来のことである」と述べていた。第4章のなかで、1890年代の渡米熱を時代背景として論じていたため、ここでは、「植民」政策より、「殖民」政策と表記したのほうが適切だと思われる。小熊英二『植民政学』と開発援助—新渡戸稲造と矢内原忠雄—(稲賀繁美編『異文化理解の論理にむけて』名古屋大学出版会、2001年6月)、注4を参照、173頁。また、『新渡戸稲造全集第4巻』(教文館、1969年)、49-50頁、346-453頁。

- 2 関露は、ヒューズの作品を二つ翻訳した。それぞれ『上海婦女』の第3巻10期（1939年11月10日）と第3巻第11期（1939年11月29日）に発表した。原題は不明であるため、関露の翻訳のタイトルのみを示す。関露訳（アメリカ・ラングストン・ヒューズ作〔米国休士作〕）、「競売場の奴隷（競売場的奴隷）」『上海婦女』（第3巻10期1939年11月10日）、関露訳（アメリカ・ラングストン・ヒューズ作〔米国休士作〕）「ローギさんとポーリン—或る白人と黒人少女の恋物語（洛義先生と保琳—一個白人和一個黒女孩恋愛的故事）」（『上海婦女』第3巻11期1939年11月25日）。丁言昭編『関露啊関露』（人民文学出版社、2001年11月）を参照。
- 3 俊子の読書記録からその一側面が窺い知れる。明治後期から大正にかけて流行していたダヌンツィオの『死の勝利』について、俊子は、最初「ハーデングの英訳」を読み、「極度の感激の為に殆ど泣き通して読んだ」が、その後、生田長江の訳を読んで「先ほどの印象はありませんでした」と述懐していた。また、『死の勝利』を感激したあまり、「当座は伊太利へ無暗に行きたくなって、伊太利語を勉強するなんて云ひ出して夢中になつたり、もつと三味線を本式に勉強して伊太利へ漂泊してに女乞食^{ジプシー}ならうかなんて」まで考えていた。『死の勝利』のなかに描かれている「宿命の女」像は、当時、日本文壇に大きな影響を与えていた。同時期に俊子が描いていた女性像も、実際にこのような「宿命の女」像と重なる部分が多い。前述したことからわかるように、俊子が西洋文学をある程度を通読していたのではないかと推測できる。田村俊子「読んだもの二種 『死の勝利』——生田長江訳、『絵の具箱』——岡田八千代著」（『新潮』第18巻第3号1912年3月）。また、平石典子の「「新しい女」からの発信——『あきらめ』再読」（『人文論叢』（三重大学）2000年3月）を参照。